

シャレイア語文法

3代5期 第1改訂版

Ziphil Aleshlas

適用日

適用日

シャレイア語 3代5期の文法は、シャル暦 1502年1月1日 (グレゴリオ暦 2012年11月18日) から適用される。これ以前に書かれたシャレイア語の文章は、ここに記載されている文法に則っていないため、注意すること。

文字

祠字

シャレイア語では、「祠字」と呼ばれる全部で 23 個のアルファベットを用いる。文字の形と発音とそのラテンアルファベット転写は以下の通りである。左上の文字が転写で、大きい文字の左側は小文字、右側は大文字である。

s I L	z d D	t h Λ	d n N	k q θ
g g 8	f p P	v z Z	p c G	b b B
x x X	j v V	r D D	l ʔ 2	m 3 E
n s S	h φ Φ	y y Ψ	' '	
a I †	e c C	i o O	o u V	u n N

ラテンアルファベット転写は、コンピュータなどの祠字を直接表示できない環境で用いたり、祠字を覚える前の学習者が用いたりするためのものである。

大文字は普通の文では用いず、装飾を行いたいときに限り、各単語の最初の文字だけ大文字にする。'は単語の先頭に来ないので、大文字が存在しない。

数字

シャレイア語は数を 10 進法で数えるので、以下の 10 個の数字を用いる。数の読みについては〈数詞〉の項を参照のこと。

0	1	2	3	4
∅	1	9	ə	ɛ
Т	3	e	6	В

文章を書く際は、数の読みをアルファベットで書くのではなく、数字をそのまま書くのが一般的である。

音韻

音韻

シャレイア語で使われる子音の音韻は以下の表の通りである。[h]は声門摩擦音だが、表のスペースの関係上、口蓋垂の位置に記載する。

	両唇	唇歯	歯茎	後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂
鼻	m, '[m]	'[m]	n, '[n]			'[ŋ]	'[N]
破裂	p[p] b[b]		t[t] d[d]			k[k] g[g]	
はじき			l[l]				
摩擦	f[ɸ] v[β]	f[f] v[v]	s[s] z[z]	x[ʃ] j[ʒ]		*[w]	h[h]
接近			r[r]		y[j]		
側面摩擦			l[l]				

f, v, lに対応する音韻がそれぞれ2種類あるが、これらは自由異音である。f, vの発音は話者の住む地域によって異なる傾向にある。lの発音は基本的に [l] だが、lが母音字を伴わずに現れた場合は [r] になることがある。'の発音は条件異音で、次の表のように後続する音素によって変化する。

後続音	発音
k, g	[ŋ]
f, v	[m]
p, b, m	[m]
s, z, x, j, r, h, y	[N]
t, d, l, n	[n]

母音は以下の通りである。以下の表以外に曖昧母音も用いる。

	前舌		中舌		後舌
狭	i[i]				u[u]
半狭	e[e]	i[i]		u[u]	o[o]
半広					
広	a[a]				

[ɪ] と [ʊ] は ai, ei, au, ou などの二重母音のときのみ現れる。

発音

シャレイア語で使われる祠字は全て表音文字なので、文字が表す音をそのまま読めば良いが、'以外の子音が母音を伴っていない場合は、必ず曖昧母音を伴って読む。例えば **drok** は [dɑɪɔkə] と発音される。ただし、その子音が無声音だった場合、後続する曖昧母音が無声化する場合がある。例えば **difk** は f に伴う曖昧母音が無声化されて [difkə] と発音されることがある。特に s と f は無声化される傾向が強い。

[ɪ] の挿入

語末が母音の語の後に語頭が母音の語が続くと、母音の区切りを示すために、その母音の間に [ɪ] が挿入されて発音されることがある。例えば、**o a sa't** は [o.ɪa sant] と発音される場合がある。この変化はゆっくり話すときには起こらない。

連続母音の音変化

特定の母音が単語内で連続する場合、以下の表のような半母音が挿入されることがある。

語	発音	語	発音
ia	[iɪa]	ua	[uɪuɑ]
ie	[iɪe]	ui	[uɪui]
io	[iɪo]	ue	[uɪue]
ea	[eɪa]	uo	[uɪuɔ]

例えば、**xaleia** は [ɟaleiɪa] と読まれることがある。この変化は話者によって起こったり起こらなかったりする。

品詞

品詞と用法

シャレイア語には5つの品詞がある。動詞型不定詞、名詞型不定詞、機能詞、助接詞、間投詞であり、1つの単語に1つの品詞が割り当てられる。

一方、1つの単語には複数の文法的用法がある。この用法は全部で7種類あり、動詞、名詞、形容詞、副詞、助詞、接続詞、間投詞である。動詞形不定詞と名詞形不定詞は全て動詞、名詞、形容詞、副詞の用法があり、助接詞は助詞、接続詞の用法をもつ。なお、以降の文法解説では、この用法を用いて説明する。

飾詞

7つの品詞以外に、シャレイア語には飾詞というものがある。これは、いわゆる接頭語や接尾語のことで、他の語の前や後について意味をつけ加える役割がある。

用法の明示

不定詞は、全て動詞、名詞、形容詞、副詞の4つの用法をもっていることはすでに説明したが、しばしばどの用法で用いているか曖昧になる場合がある。これは特に形容詞と副詞の間で起こる。そこで、以下の飾詞を語の最後につけることで、形容詞か副詞かを区別することができる。

飾詞	品詞
ez	形容詞
om	副詞

例えば、形容詞「本当の」と副詞「本当に」の用法をもつ **sez** に飾詞 **ez** をつけて **sezez** とすれば、形容詞の意味に限定され、品詞が曖昧になることはない。

なお、これらの飾詞は口語で用いられることはない。

動詞の活用

活用

動詞は時制と相で活用する。活用の仕方は、語幹＋時制母音＋相子音である。時制を表す母音は以下の通りである。

音	時制
o	通時
a	現在
e	過去
i	未来

また、相を表す子音は以下の通りである。

音	相	音	相
f	開始	t	継続
k	経過	d	終了
l	完了	s	無

例えば、動詞 **sef** が現在時制終了相を表す場合、**sefad** と活用する。

それぞれの時制と相がどのような意味をもつかについては、〈時制〉と〈相〉の項で解説する。

基本語順

動詞＋修飾語句

シャレイア語では、基本的に文の先頭には動詞が置かれ、その動詞の後に主語や目的語などの、動詞を修飾する要素が置かれる。

vales a del.

→ 私は歩いた。

上の例では、動詞 **val** が文頭にあり、その修飾要素 **a del** がそれに後続している。
修飾要素は複数にすることも可能である。この場合は、修飾語句を順に並べる。

gilses a del e dat ye jeig.

→ 私は店で椅子を買った。

この例では、動詞 **gils** が文頭にあり、それを3つの修飾要素 **a del, e dat, ye jeig** が修飾している。このとき、修飾要素の順番は自由である。すなわち、上の文章は **gilses ye jeig a del e dat** と書いても良いということである。しかし、話題を文頭に、それに対する新たな情報を文末にもってくるという特徴があるため、このようにすると筆者もしくは話者が **jeig** という話題に対し、**a del e dat** という情報を与えていることになる。

日本語の読点や英語のピリオドに相当するものとして、シャレイア語では文末に点を2つ打つ。手書きの場合はコンマのように左下に払うこともある。この点2つはピリオドで転写するため、転写では点が1つになってしまうが、実際の点は2つであるため注意すること。

被修飾語＋修飾語句

動詞を修飾する語句は動詞の後に置かれるのと同じように、名詞とそれを修飾する形容詞では、名詞が先で修飾語句である形容詞が後に置かれる。また、形容詞を修飾する副詞も同様に形容詞の後に副詞が置かれる。

sines a del e paf sa't.

→ 私は青い花を見た。

kulsat a del e vit dafs zep.

→ 私はとても高価なペンを持っている。

最初の例では **sa't** が **paf** を後ろから修飾していて、次の例では **dafs** が **vit** を修飾し、さらに **zep** が **dafs** を修飾している。

同じ語を複数の語句で修飾したい場合は、その語句を被修飾語の後に並べる。その順番に制限はない。

iltat a seef rep hail.

→ 若くかわいらしい女性がいる。

この例の **seef rep hail** の部分は **seef hail rep** と書いても良い。どちらで書いてもニュアンスの違いはない。

fik や **vok** のような指示形容詞と他の形容詞が同じ名詞を修飾する場合は、指示形容詞が後ろに置かれる傾向がある。

esat a paf rem fik e yuk zep.

→ この黄色い花はとても美しい。

li のような主に名詞を修飾する助詞句も形容詞と同じように名詞の後ろに置かれる。

esot a zostep loon vok e maz li del.

→ あの背の高い少年は私の友達だ。

動詞を修飾する副詞は、基本的に文末に置かれる。

助詞＋名詞

シャレイア語は、名詞は必ずその前に助詞を伴う。助詞は、例えば主格や与格などのように、名詞の格を示すものである。

ただし、助詞の後には必ず名詞がくるとは限らない。例えば、すでに例文として出ているが、動詞 **es** に続く助詞 **e** には形容詞が置かれることもある。ただし、このような例は少ないので、基本的に助詞の後には名詞で、名詞の前は助詞としてもあまり問題はない。

助詞と名詞もしくは形容詞はまとめて「助詞句」と呼ばれ、たいてい動詞を修飾する。li や ka などの一部の助詞による助詞句は名詞を修飾する。

否定文

基本否定文

否定文は、肯定文の動詞のすぐ前に特殊な副詞である「否定副詞」と呼ばれる副詞 **nu** を置くことで作ることができる。修飾要素が前に置かれるという意味では特殊である。

nu ha'tat a del e los.

→ 私はあなたが好きではない。

nu iives a del de xaleia ta ketaak.

→ 私は昨日シャレイア国へ行っていない。

この副詞 **nu** は動詞以外も否定する。例えば、名詞を否定すると「～ではない何か」を表すことができる。同じように形容詞や副詞も否定できる。

esot a del e nu elvis.

→ 私はエルヴィスではない。

nu が動詞を否定したときは単に「～ではない」という事実のみを表すが、名詞を否定したときは「～ではなく他の何かである」というニュアンスが入る。

否定副詞には **nu** の他にも **du** というものがある。これは **nu** を強調したもので、英語でいう **never** に相当する。使い方は **nu** と同じである。

部分否定, 全部否定

否定副詞 **nu**, **du** は直後の語のみを否定する。これを活かすと全部否定と部分否定の文を作ることができる。

動詞の前に **nu** を置いて動詞を否定すると、全部否定の文になる。

nu rosos a del ta keil et.

→ 私は毎日走らない。

この文章では、nu が否定しているのは ros だけなので、「走らない」を a del 以下の語句が修飾している。「毎日走らない」という全部否定の文になる。一方、「全ての」を否定することで部分否定の文になる。

rosos a del ta keil nu et.

→ 私は毎日走るとは限らない。

この例では「全ての日」の「全ての」が否定され、部分否定の意味になっている。

部分否定を作る語として以下のようなものがある。

語	意味
nu et	全て～とは限らない
nu edon	必ずしも～とは限らない
nu eeks	いつも～とは限らない
nu mal	再びは～しない

否定相当語

シャレイア語では、否定副詞を伴わなくても否定を意味する語がいくつかある。例えば nees は「誰も～ない」という意味の否定相当語である。

riifes a nees ye marb vok.

→ 誰もあの家に住まなかった。

他にも否定相当語は以下のようなものがある。

語	意味
nees	誰も～ない
neerg	何も～ない
neelt	どこも～ない
nek	全く～ない
niib	ほとんど～ない
neel	絶対～ない

二重否定

シャレイア語で二重否定は強い肯定を表す。二重否定の文は主に否定相当語＋否定副詞で作られる。

nu vi'fak a nees.

→ 誰も急いでいないのではない。

疑問文

諾否疑問文

諾否疑問文は、平叙文の文末に「終副詞」と呼ばれる特殊な副詞 **sii'** をつけ、文末の記号を点 2 つではなく、「?」という記号にすることで作ることができる。この終詞については〈終副詞〉の節で詳しく説明する。

oksas a los e lixaleia sii'?

→ あなたはシャレイア語を話すか?

疑問文を読むときは文末を上昇気味に読む。

諾否疑問文に答える場合は **ja** と **ne** を用いる。**ja** は聞かれた内容が正しいとき、すなわち聞かれた疑問文の **sii'** を取った文章が真実のときに使う。**ne** はその逆である。

iiges a los e kanz ho tees sii'? / ne.

→ 彼からお金をもらったか? / いいえ。

疑問詞疑問文

疑問詞を用いる疑問文は、平叙文において尋ねたい部分を疑問詞に変えるだけで作ることができる。

esot a los e ses?

→ あなたは誰か?

alak a los e serg?

→ あなたは何をしているのか?

シャレイア語の疑問詞は全部で以下の 5 種類である。なお、これらは使われる用法が決まっていて、例えば **ses** は形容詞としては使えない。

語	意味	品詞
ses	誰	名詞
serg	何	名詞
selt	どこ	名詞
sek	どの	形容詞
sevs	どんなこと	名詞
seiv	どんな	形容詞

諾否疑問文と同じように、疑問詞を用いた疑問文の文末に **sii'** をつけても良いが、つけないのが一般的である。

助詞と疑問詞を組み合わせることで、上記の意味にない疑問文を作ることができる。例えば、「いつ」は時間を表す助詞 **ta** と疑問詞 **serg** を用いて表現できる。

zo raak a los e marb ta serg?

→ あなたはいつ家を買ったのか?

このように作ることができる疑問詞句には、以下のようなものがある。

語	意味
ta serg	いつ
ye selt	どこで
sali sevs	なぜ
da sevs	どうやって

疑問詞疑問文に答える場合、答えが名詞、形容詞、副詞の場合は、助詞+回答もしくは接続詞+節の形で答える。

iives a los de delfaria ta serg? / ta ketaak.

→ あなたはいつデルファリア市に言ったのか? / 昨日だ。

ha'tat a los e zas seiv? / e zas yuk.

→ あなたはどんな人が好きか? / 美しい人だ。

答えが同士の場合は、助詞+ki'+節の形で答える。

ales a los e sevs ta ketak? / e ki' akutes a del e tees.

→ あなたは昨日何をしたのか? / 私は彼に会った。

ただし、このときしばしば助詞+ki'が省略されることがある。

選択疑問文

選択疑問文における選択枝は、助詞 **depi** を用いて表現する。選択枝と選択枝は後に説明する接続詞 **o** を用いてつなげる。

esat a serg e boyk jok depi vorg o firg?

→ あれとこれではどちらがより安いのか?

上の例では、まず「何がより安いのか」という普通の疑問文を作り、そこに **depi** 句を用いて選択枝を提示している。このとき、必ず疑問文内に比較の意味の語が含まれる。上の例では「より～」という **jok** という語が使われている。比較の表現については〈比較〉の節で説明する。また、この場合も、文末に **sii'** をつけても良い。ただしつけないのが主流である。

depi 句を使わずに、接続詞 **ai** を用いて2つ以上の疑問文をつなげて選択疑問文を作ることもしできる。

esat a vorg e boyk jok sii', ai esat a firg e boyk jok sii'?

→ あれがより安いのか、それともこれがより安いのか?

esot a los e saxalia sii', ai nu esot a los e saxalia sii'?

→ あなたは魔導師か、それとも魔導師ではないのか?

ただし、上の文は繰り返されている部分があり冗長なので、以下のように略されることがほとんどである。

esat a vorg ai firg e boyk jok sii'?

→ あれがより安いのか、それともこれか?

esot a los e saxalia ai nu lot sii'?

→ あなたは魔導師か、それともそうでないのか?

ここで出てきた lot は動詞 l の活用形である。これについては〈動詞 l〉の項で説明する。

動詞の用法

時制

シャレイア語の時制は、通時、現在、過去、未来の 4 種類がある。

通時時制は、ある程度長い一定の時間内において不変である事実を述べるときに使う。例えば、「地球は青い」や「彼はシャレイア語を話す」などである。後者の例は永遠に正しい事実ではないが、彼が生きているというある程度の時間の幅の中では常に正しいことなので、通時時制を用いる。習慣なども通時時制で表す。

esot a a's li vos e sa't.

→ あの人の目は青い?

faapos a del ta 3 na'b.

→ 私は 3 時に起きる。

現在時制、過去時制、未来時制は、それぞれ現在の出来事、過去の出来事、未来に起こるであろう出来事を表す。ただし、英語の will とは違い、未来時制に推量の意味は含まれない。

相

シャレイア語相は開始、経過、完了、継続、終了の 5 種類がある。

経過相、継続相はそれが表す時間に幅があり、それに対し、開始相、完了相、終了相はある時間の 1 点のみを表す。無相は、開始相から完了相まで全体を表す。

riifat a del ye xaleia.

→ 私はシャレイア国に住んでいる。

zalad a del e tast fik.

→ この本を読み終わった。

経過相と継続相は混同しやすいので注意が必要である。動作が完了していれば継続相であり、完了していなければ経過相になる。

なお、動詞の中には継続相と終了相をとらないものもあり、これを「三相動詞」と呼ぶ。そうでないものを「五相動詞」と呼ぶ。

自他

動詞には「起きる」と「起こす」という、自分自身で可能な動作を表す動詞と、その動作を相手ができるように手助けしてあげることを表す動詞のペアが存在する。このペアとなった動詞を、シャレイア語では「自他動詞」と呼び、前者を「自動詞」といい、後者を「他動詞」という。

シャレイア語ではこの自動詞と他動詞を明確に区別せず、同じ動詞を用いて表現する。どちらの意味で用いているかは、動詞の前に以下に示す「自他詞」と呼ばれる副詞を置いて明示する。

語	自他
te	自動
ve	他動

また、原則として他動詞の相手を示す助詞は **je** を使う。

te daoles a del.

→ 私は横になった。

ve daoles a del e tees.

→ 私は彼を横にした。

「走る」のような自他動詞のペアをもたない動詞は全て自動詞として扱い、動詞の前に **te** を置く。ただし、この自他詞はほとんど使われず省略される。省略された場合は **je** 句があるかないかで自動詞と他動詞を区別する。

法

法は「法副詞」と呼ばれる特殊な副詞を動詞の前に置いて表現する。以下に主な法副詞を挙げる。

語	意味
kazo	～しろ
hasi	～することができる
vije	～するべきだ
sete	～するつもりだ

kazo は否定副詞を伴うと「～するな」という禁止の意味になる。また、**sete** や **sali** などは意味上未来時制とともに用いられることが多い。

sete dooxis a del.

→ 私は寝るつもりだ。

kazo nu zoonis a los to filt.

→ あなたはここを去るな。

kazo を用いたとき、命令の相手はたいてい **los** であるため、ほとんどの場合、この **los** に略記形が適用される。省略形については〈省略形〉の項を参照。

kazo laskas as.

→ 消えろ。

また、**kazo** の命令の相手を自分自身にすることもでき、この場合は、そうしていない自分に対する戒めのニュアンスが出る。

受動態相当表現

受動態相当表現

シャレイア語は、「～する」という能動態と「～される」という受動態を区別して表現しない。これは、能動態、受動態というのは、主語か目的語のどちらが話題となっているかの違いにすぎないため、この違いを前置詞句の順番で表現すれば良いからである。

普通、主語を表す **a** 句は主題になりやすいので動詞のすぐ後に置くが、目的語を表す **e** 句や **je** 句を代わりに動詞のすぐ後に置くことで、目的語の部分为主题にすることになり、受動態のような表現を作ることができる。これを「受動態相当表現」という。

taldes a del e vabans fik.

→ 私はこの時計を作った。

taldes e vabans fik a del.

→ この時計は私によって作られた。

比較

比較級

A と B の2つのものを比較したときの「A は B より～だ」という表現を「比較級」と呼ぶ。

比較級の文を作るには、まず「A は～だ」と「B は～だ」という通常の文を書く。

esat a paf vok e yuk.

→ あの花は美しい。

esat a paf fik e yuk.

→ この花は美しい。

次に、比較している概念を表している形容詞または副詞(上の文では **yuk**)の、「より～」という意味の副詞 **jok** をつける。

esat a paf vok e yuk jok.

→ あの花はより美しい。

最後に、比較対象の B を含む文を接続詞 **ge** の後に置く。接続詞の使い方については〈接続詞〉の節で説明する。

esat a paf vok e yuk jok, ge esat a paf fik e yuk.

→ あの花はより美しい。

しかし、これでは冗長なので、主節と同じ内容の部分は次のように省略する。このとき、**ge** 句の内容が短いので、**,** が取り除かれることが多い。

esat a paf vok e yuk jok ge a paf fik.

→ あの花はより美しい。

比較対象を表す **ge** 節は省略することができる。その場合、文脈から比較対象が明らかか、もしくは漠然とした比較のどちらかになる。

「私は彼女より 7cm 背が高い」などのように、どの程度違うかを表すには **same** 句を使う。

esat a del e loon jok ge a tees same 7 tevokt.

→ 私は彼より 7 テヴオクト (約 7.7cm) 背が高い。

倍数表現も比較級を用い、その倍数は **same** 句で表現する。

esot a xaleia e foon jok ge a ark li del same 2 leis.

→ シャレイア国は私の国より 2 倍広い。

上の例のように倍数は数字に **leis** をつけて表す。

最上級

A を X という範囲の中で比較したときの「A は X の中で最も～だ」という表現を「最上級」と呼ぶ。

最上級の文を作る方法は比較級の場合とほぼ同じである。異なる点は「最も～」という意味の副詞 **vask** を用いることと、**ge** 節を用いずに範囲を表す「～の中で」という表現は **depi** 句を用いることである。

hasi rosos a fis sailom vask depi ku'l li del.

→ この人はクラスの中で最も速く走ることができる。

この文において、**sail** が副詞ではなく形容詞として **fis** を修飾し、「クラスの中で最も速いこの人が走る」という意味にとられないよう、副詞であることを明示するため、**sail** に飾詞 **om** をつけた。このような飾詞については〈用法の明示〉の項ですでに説明した。

「2 番目に～だ」のように順位を表す場合は、比較級のときと同じ **same** 句を用いる。

esat a ark sek e foon vask same 5 jus?

→ 5 番目に広いのはどの国か?

上の例の比較の範囲は「世界の全ての国」であるが、それは明らかなので、省略されている。

同等級

A と B の 2 つのものを比較したときの「A は B と同じくらい～だ」という表現を「同等級」と呼ぶ。

同等級の作り方は比較級と同じである。「同じくらい～」は **gefk** を用いる。

esat a vos e keet gefk ge a zостаft li del.

→ あの人は私の彼氏と同じくらいかっこいい。

別の表現として、**ge** 句を使わずに比べるものを 2 つ並べる方法もある。表現している内容は同じである。

esat a vos o zостаft li del e keet gefk.

→ あのひと私の彼氏は同じくらいかっこいい。

ただし、最初の文は主語である **vos** が話題となっていて、次の文は **vos** と **zостаft li del** の両方が話題となっているという点では、ニュアンスが少し異なる。

関係詞表現

関係詞表現

次の 2 つの文を 1 つにまとめたい。

esot a vos e seef.

→ あの人は女性だ。

akutes a del e tees ta ketak.

→ 私は昨日彼女に会った。

2 文目の **tees** が 1 文目の **seef** を表しているとするれば、2 文目を 1 文目の **seef** を修飾するという形をとって、文を 1 つにまとめることができる。それを作るには、まず修飾される名詞と同じものを表している名詞 (上の例では **tees**) を消す。そして、この修飾する文を被修飾語のすぐ後ろに置く。これで文をまとめることができる。消された名詞がある文の方を「関係詞節」といい、もう一方の文を「主節」と呼ぶ。

esot a vos e seef akutes a del e ta ketaak.

→ あの人は私が昨日会った女性だ。

ただし、消された名詞に付属していた助詞の位置を変えても意味が変わらない場合、すなわちその助詞句が動詞を修飾していた場合は、次の例のようにその助詞を動詞の直後にもって行くことが多い。

esot a vos e seef akutes e a del ta ketaak.

→ あの人は私が昨日会った女性だ。

以下の文のように、名詞を修飾している助詞句の内容が関係詞に変化した場合は、助詞の位置を変えると意味が変わってしまうため、そのままの位置にする。

matat a del e zостep esot a mafs li e saxalia.

→ 私は母親が魔術師の少年を知っている。

名詞がすでに形容詞で修飾されていて、さらにその名詞を関係詞節で修飾したい場合は、名詞＋形容詞＋関係詞節の順になる。

iltat ye kuml li del a des vaf zep iiges e a del ho tees.

→ 彼からもらったとても大きな机が私の部屋にある。

関係詞節内の時制は、主節の時制より前か後か同じかを示す。すなわち、主節が過去時制で関係詞節が現在時制なら、関係詞節内は過去における現在を表すので、今から見ると過去の出来事ということになる。主節が定時時制の場合は、関係詞節の現在形は現在、過去形は過去、未来形は未来を表す。

接続詞

一般接続詞

語句と語句、文と文をつなげるものを「接続詞」と呼ぶ。接続詞には、以下のようなものがある。

語	意味	語	意味
o	そして	ta	～するとき
ai	もしくは	tora	～するために
zae	しかし	sali	～するので
zi	もし	dasi	～するように

oとaiは語句と語句をつなげることができるが、他の接続詞は文と文しかつなげることができない。文と文をつないでいる場合、接続詞がつけられた方の文を「接続詞節」と呼び、それに対してもう一方を「主節」と呼ぶ。

接続詞には、同じ意味で助詞の用法をもっているものが多い。例えば、時刻を表す ta は「～のとき」という意味で、後ろに名詞をとって助詞として使うことができる。

接続詞で2つの文をつなぐ場合は、文と文の間にコンマに相当する記号, を打つ。

sali ha'tat a del e tast, kulsat a del e teerg hosk.

→ 私は本が好きなので、たくさんの本を持っている。

また、接続詞節は主節の前に置いても後ろに置いても良い。例えば上の例文を以下のように書いても良い。

kulsat a del e teerg hosk, sali ha'tat a del e tast.

→ 私は本が好きなので、たくさんの本を持っている。

接続詞節では、関係詞節とは違って時制が主節と相対的に決まるわけではない。主節が過去時制で接続詞節が現在時制ならば、接続詞節の内容は現在の出来事を表す。

接続詞 ki'

すでに挙げた接続詞の他に、ki' という接続詞がある。これは「～ということ」という意味で、英語

の to 不定詞, that 節, wh-疑問詞節の 3 つの役割を全てもつ。

ha'tat a del e ki' deztos e deti'z al.

→ 私は数学を学ぶのが好きだ。

esot e sas a ki' famkes a tees je mafs.

→ 彼が母を手伝ったのは良いことだ。

nu matat a del e ki' zoones a tees to filt ta serg.

→ 私はいつ彼がここを去ったのか知らない。

最初の例文の al というのは、a+一人称代名詞の略記で、ki' 節内の a+一人称が主節にも同じ形である場合に使われる。同様にして、e+一人称が ki' 節で再び使われる場合は el になり、je+一人称ならば、jel となる。

接続詞の副詞的用法

接続詞の働きは、基本的に 2 つの文をつなげて 1 つの文にすることだが、2 つの文の意味上のつながりを表すこともある。

kulsat a del e teerg hosk. sali, ha'tat a del e tast.

→ 私はたくさんの本を持っている。それは本が好きだからだ。

上の例では、接続詞 **sali** は文と文をつなげているわけではないが、結果と原因という、前の文と後の文の意味上のつながりは表している。これを「接続詞の副詞的用法」といい、接続詞の後には、**を** 打つ。このとき、接続詞の前の文の最後の **.** を、**,** にし、接続詞の後の **,** を取り除くと、通常の接続詞の用法で、同じ意味の 1 文ができる。

敬語

丁寧表現

文末に **ta'** を置くことで、話し手もしくは読み手に丁寧なニュアンスを伝えることができる。

esot a del e elvis ta'.

→ 私はエルヴィスです。

また、**ta'** の代わりに **take'** という語を用いると、さらに丁寧な表現になる。

尊敬表現

シャレイア語で敬意を表現するには、「A が～する」という文を「誰かが A に～させる」と書き換えれば良い。すなわち、文の重点を他の人にずらすのである。

stanes e' zofas a tees de marb li del.

→ 彼が私の家にいらっしゃった。

省略

語句の省略

繰り返しは冗長であるため、2回目以降の繰り返しの部分はよく省略される。このとき、動詞が省略される場合は、代わりにIという動詞を用いる。

toses a xeif to sa't de fals, o les to fals de ba'k.

→ 空は青から赤に変わり、赤から黒に変わった。

この例では、oとtoの間にtoses a xeifが省略されていて、tosesがlesになっている。

また、繰り返しでなくても、文脈上内容が明らかな場合は省略される。ただし、この場合、少なくとも主語にあたるa句や、受動態相当表現の主語であるe句やje句は書かれる。

日付, 時刻の略記

「～年～月～日」や「～時～分」などの日付や時刻は、数字を:で区切った略記法が用いられることがある。このとき、年は4桁、月、日、時、分、秒は2桁になるように、桁が足りない場合は0を先頭につけ足す。例えば、1496年7月25日は1496:07:25と略記され、8時12分は08:12と略記される。読むときは数字だけを読む。

略記形

a ki', e ki', je ki'のような、助詞+ki'節の形はよく用いられるので、略記が用意されている。これらをそれぞれa', e', je'と略記する。

また、命令文の命令の相手を示すときのa+二人称, e+二人称, je+二人称は、それぞれas, es, jesと略記される。また、a+一人称, e+一人称, je+一人称が、主節と同じ形でki'節内に現れる場合、それぞれal, el, jelと略記される。

合成語化

前に出てきた形容詞節などで修飾された長い名詞を、もう一度後に使うとき、teesやteergなどの名詞では曖昧であると感じる場合、その名詞と形容詞節内を代表する語を-でつなげて1語として用いることができる。例えば、前の文脈でzas hasi oksos a e lixaleiaという名詞が出てきたとして、もう一度その人のことを言いたい場合、形容詞節hasi oksos a e lixaleiaを代表する語lixaleiaとzasをつなげて、zas-lixaleiaとして使うことができる。

他の表現

挿入

動詞を修飾する副詞は基本的に文末に置くが、文中に置くことも可能である。これを「副詞の挿入」と呼ぶ。

次の文では、副詞tuktが文末に置かれている。これは最も一般的な書き方である。

iivos a del de teelt tukt.

→ 私はそこへときどき行く。

この副詞を文中にもって行くこともできる。動詞のすぐ後にもって来る場合は特に何も必要ないが、前置詞句と前置詞句の間にもって行く場合は、その副詞の前後に、が必要である。

iivos tukt a del de teelt.

→ 私はときどきそこへ行く。

iivos a del, tukt, de teelt.

→ 私はそこへときどき行く。

上の例文の2つ目のように、助詞と助詞の間に副詞を置く場合、その副詞は文全体を補足しているというニュアンスになる。

また、助詞句の前後に、を打って挿入的に表記することで、その助詞句が文全体を補足説明しているというニュアンスが出る。

強調

名詞を強調したい場合は、強調したい語を含む前置詞句を文頭にもって行き、を打つことでそれが可能である。

e tees, veizes a del.

→ 私は待ったのは彼だ。

同じように動詞を修飾している副詞も前にもって行き強調することができる。ただし、名詞を修飾している副詞や形容詞はこのような方法で強調することができない。

詠嘆

詠嘆を表現するには、〈終副詞〉の項で説明する *ree'* や *rede'* を使えば良いが、普通、このときに機能副詞や動詞や主語などが省略され、*e*+形容詞+*ree'* の形になることが多い。

e yuk ree'.

→ なんて美しいんだ。

文脈上、主語を明示しないと何に感動しているのか分からないと思った場合は、主語をつけ足すこともできる。

区切りの明確化

関係詞節がついた場合などの、1つの長い助詞句が文の真ん中に置かれたとき、どこでその助詞句が終わるのかわかりにくくなる場合がある。

akutes a kol e seefep esot a zols li e hefs ta ketaak.

→ 私は昨日父親が天才である少女に会った。

上の例では、*seefep* を修飾する関係節が、文脈から考えれば決定できるが、少し見ただけでは、*e hefs* までなのか *ta ketaak* までなのか分かりにくい。そこで、区切れを明示するために、を打つ場合がある。

akutes a kol e seefep esot a zols li e hefs, ta ketaak.

→ 私は昨日父親が天才である少女に会った。

ただし、あまりにも長い文章はシャレイア語では嫌われるので、区切りを明示するための、を1つの文章に2回以上使うような文は、2つの文に分けた方が良い。

重要語

終副詞

副詞の中では必ず文末で用いられるものがあり、これを「終副詞」と呼ぶ。これまで説明したものの中では、疑問文を作る **sii'** と丁寧を表す **ta'** や **take'** がそれである。

終副詞は大きく3種類に別れ、1つは文に他の意味をつけ加える働きがあり、主に以下のようなものがある。

語	意味
sii'	～か (疑問)
ta'	～です (丁寧)
take'	～でございます (丁寧)
sae'	～ですよ (確認)
salti'	～だがどうか (返事催促)

2つ目は、その事実に対する使用者の心情を表したものである。これは口語と文語の両方で用いられるが、文語の論説文などで用いられることは少ない。

語	意味
fea'	～してくれる (感謝)
gu'	～しやがる (迷惑)
bi'	～である (断定)
ree'	～だなあ (弱詠嘆)
rede'	～だなあ (強詠嘆)

3つ目は、語調を整えるもので、日本語の「～さ」や「～だわ」などと同じである。口語でしか用いられない。これは語によって主に使用する性が決まっているので、それも同時に記しておく。ただし、**mi** は4歳くらいまでの幼児のみが用いる。

語	印象	性
o	軽い	男女
vo	活発な	男
ki	元気な	男
fe	穏やかな	男

語	印象	性
mi	軽い	男女
tu	活発な	女
mi	元気な	女
si	穏やかな	女

o は接続詞にもあるが、偶然の一致であり、関係はない。

前置副詞

副詞は修飾要素なので、基本的にその被修飾語の後に置かれるが、一部の副詞は例外的に被修飾語の前に置かれるものがある。これを「前置副詞」と呼ぶ。前置副詞には、**efs** や **lub** などがあり、普通はそれがかかる名詞に付随する助詞の前に置かれる。

duulos efs a zas hefs.

→ 天才でさえも失敗する。

ただし、否定副詞の **nu, du** も被修飾語に前置されるが、これは前置副詞に入れない。

動詞 I

動詞の I は、動詞の繰り返しを避けるために用いられる動詞で、英語の代動詞 **do** に当たる。ただし、比較表現の **ge** 句内で動詞が省略された場合、この I も使われずに動詞が書かれないことが多い。

間投詞

感動や呼びかけなどの際に発する語を「間投詞」と呼ぶが、シャレイア語ではこれの扱いは副詞と同じである。すなわち、以下のような語順がとれる。

tee, alak a los e sevs?

→ ねえ、あなたは何をやっているの?

alak a los, tee, e sevs?

→ あなたは、ねえ、何をやっているの?

alak a los e sevs, tee?

→ あなたは何をやっているの、ねえ。

この例のように、文末で間投詞が使われるときは、副詞のときと違ってその前に、**tee** が置かれることが多い。

また、副詞と異なり、単独で文を成すことができる。諸否疑問文に対して **ja** や **ne** だけで答えられるのがそれである。

数詞

数詞

シャレイア語での 0 から 9 までの数字の読みは以下の通りである。

数	読み	数	意味
0	dul	5	xos
1	o't	6	fiz
2	meg	7	kus
3	sil	8	bid
4	vak	9	rot

位の読み方は日本語と同じである。十、百、千の小区切りと万、億、兆、京、…の大区切りがある。

数	読み	数	意味
十	hat	兆	sanak
百	fool	京	vanak
千	geef	垓	xanak
万	onak	秭	fanak
億	manak	穰	kanak

例えば、578902 は xos hat kus onak bid geef rot fool meg と読む。

口語

sii' の省略

口語では、諾否疑問文のときにつけられる sii' が省略されることがある。省略された場合は、文末を上昇気味に読むだけになる。ただし、反語表現の場合の sii' は省略されない。

命令表現

普通、命令は法副詞 kazo を用いて表現するが、口語では kazo を用いずに命令を表現することがある。

命令の丁寧さには5段階ある。それぞれ以下のようなになる。

kazo zoonas to filt as ta'.

→ ここを去ってください。

kazo zoonas to filt as.

→ ここを去って。

zoonas to filt as sii'.

→ どうしてここを去らないのだ。

zoonas to filt as.

→ ここを去れ。

zoonas to filt as!

→ ここを去れ!

最初の例文が最も丁寧な命令で、最後の例文が最も乱暴な命令である。